

聖霊降臨節第6主日礼拝 6月27日(日)

題 『聖霊を冒瀆する者は赦されない』

テキスト：マルコによる福音書3章20～30節

親愛なる皆さん、おはようございます！

今日の聖書の箇所は、

新約聖書の中でも理解が難しい箇所とされています。

わたしも、そう思います。この箇所は昔から「ベルゼブル論争」と言われます。

「聖霊を冒瀆する者は赦されない」というタイトルをつけました。」

どういうことでしょうか？ 共に思い巡らし、想像し、考えましょう。

◆ベルゼブル論争

20:イエスが家に帰られると、群衆がまた集まって来て、一同は食事をする暇もないほどであった。

イエスと弟子たちの活動の拠点であったカファルナウムの町、村に帰られたのかもしれませんが。家に帰られると、群衆がまた集まって来て、一同は食事をする暇もないほどであった。弟子たちもイエスの癒しのわざを忙しく手伝っていたのだと思います。イエスさまは、十字架につかれる前から、罪の赦しの宣言と

いやしの業を行っておられたのです。愛に生きられたイエスです。

「食する暇もうち忘れて」という讃美歌を思い出します。

そこへ、

21:身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに來た。「あの男は気が変になっている」と言われていたからである。

「取り押さえに來た。」何か、物騒なことだと思います。

また「あの男は気が変になっている。」とありますが、母マリアを始めイエスの兄弟たちも悪い噂を聞いていたのです。

他の聖書の訳では家族も「気が変になっている」と思っていたようです。イエスは家族からも理解されていなかったのです。編集者マルコは、弟子たちもイエスを思いながらも、イエスが「救い主・メシア」であることを無理解であったと伝えています。わたしたちはどうでしょうか？家族の中で一人、キリスト者になった人は、家族の中でなかなか理解されないという経験もあるでしょう。わたしもその一人です。

家族以外に

22:エルサレムから下って来た律法学者たちも、「あの男はベルゼブルに取りつかれている」と言い、また、「悪霊の頭の力で悪霊を追い出している」と言っていた。

「エルサレムから下って来た律法学者たち」。エルサレムの町は、2000年前のイスラエルの中心の町です。「律法学者たち」は聖書、旧約聖書の専門家たちで、民の指導者です。

彼らは、イエスを「あの男はベルゼブルに取りつかれている」と言い、また、「悪霊の頭の力で悪霊を追い出している」と言って厳しく非難したのです。「ベルゼブル」とは、古代からその地域では「家の主」であり、「汚物神」として信じられていたようです。ここでは悪霊の親玉、頭であるとみなされています。イエスが神以外に人を赦すことはできないのに人を赦したり、病人を癒したりすることを理解できず、「ベルゼブルにとりつかれて、悪霊の頭の力で悪霊を追い出している」としか、思えなかったのです。

そのような、律法学者たちや、捕えに来たイエスの身内の者たち、また理解できていないイエスの弟子たち、まわりに集まって来た多くの人々に、次のたとえを用いて語られたのです。イエスは神の真理を良くたとえを用いて語られたのです。

23:そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、たとえを用いて語られた。

「どうして、サタンがサタンを追い出せよう。

24:国が内輪で争えば、その国は成り立たない。

25:家が内輪で争えば、その家は成り立たない。

家族も国も、内部で争いが続けば、成り立たず壊れてしまいます。

26:同じように、サタンが内輪もめして争えば、立ち行かず、滅びてし

まう。これは分かりやすのではないのでしょうか。富は無くても仲の良い家族ほど幸いなものはないのだと思います。

後に生きた伝道者パウロも、ガラテヤ教会が教会内で、もめごとが多いのを聞いて、ガリラヤの信徒への手紙5章15節で「だが、互いにかみ合い、共食いしているなら、互いに滅ぼされないようにしなさい。」と忠告しています。

続いてイエスは、語ります。

「27:また、まず強い人を縛り上げなければ、だれも、その人の家に押し入って、家財道具を奪い取ることはできない。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。」と。これはどうでしょうか？ その家を奪う手法です。これは今日、いろんな組織、団体、国と国の関係に対しても当てはまることかもしれま

せん。場合においては教会でも起こりえることなのです。

そして、結論です。

28:はっきり言うておく。人の子らが犯す罪やどんな冒涇の言葉も、すべて赦される。「はっきり言うておく。」と。このことばは「アーメン」という言葉から始まります。聖書では、主イエスが大切なことを語られる時に使われています。「人の子ら」とは、ここでは人々と理解してよいと思います。

つまり、人々が犯す罪や神への冒涇も赦されると、大胆に言われます。

それほど、神さまも赦しは深く、高く、広く、大きいのです。

しかし、しかし、です。

「29:しかし、聖霊を冒涇する者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負う。」

聖霊とは、今働かれる神の愛の働きです。イエスの語られる慰めのことば、病人を癒す愛の働き、これらはすべて神の愛の力である聖霊の働きなのです。

「聖霊を冒涇する者」とは、愛の働きを認めないどころか、神の愛の働きを悪霊の働きだと断定する者のことです。

30:イエスがこう言われたのは、「彼は汚れた霊に取りつかれている」と人々が言っていたからである。

イエスの働き、神の働きをサタン悪魔の働きと言ってはいけないということです。そこには救いはない。自由も解放もない。希望もないのです。悔い改めも起こりようがないのです。

しかし、神さまは人が心を入れかえて自分の元に戻って来ることを待っておられるのです。あの放蕩息子の父親のようにです。

この場面で、

誰もイエスに反論できなかったようです。反論できない律法学者たちは、憎しみにかられて、イエスを何とか捕えよう、そしてついに殺そうと命を狙うこととなっていたのです。残念ながら、彼らこそが、悪の親玉であるベルゼブルの支配下に下ったのです。

イエスさまは人や組織に支配されず、徹底して神の愛の中を苦勞を背負いながらもすがすがしく自由に生きて行かれたのです。

わたしたちも、神とイエスさまから、まことの愛と自由を頂いたのです。

主イエスは十字架に至るまで身を持って愛を示し、教えてくださいましたのです。ですから聖霊の助けを受けながら、イエスさまにすがって従い苦しみの中でも希望をもって生きて行きたいと願うのです。この道こそが、神さまが備えてくださる最高の人生の道なのです。

◆ベルゼブル論争

20:イエスが家に帰られると、群衆がまた集まって来て、一同は食事をする暇もないほどであった。

21:身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。「あの男は気が変になっている」と言われていたからである。

22:エルサレムから下って来た律法学者たちも、「あの男はベルゼブルに取りつかれている」と言い、また、「悪霊の頭の力で悪霊を追い出している」と言っていた。

23:そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、たとえを用いて語られた。
「どうして、サタンがサタンを追い出せよう。

24:国が内輪で争えば、その国は成り立たない。

25:家が内輪で争えば、その家は成り立たない。

26:同じように、サタンが内輪もめして争えば、立ち行かず、滅びてしまう。

27:また、まず強い人を縛り上げなければ、だれも、その人の家に押し入って、家財道具を奪い取ることはできない。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。

28:はっきり言うておく。人の子らが犯す罪やどんな冒涇の言葉も、すべて赦される。

29:しかし、聖霊を冒涇する者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負う。」

30:イエスがこう言われたのは、「彼は汚れた霊に取りつかれている」と人々が言っていたからである。